

## 公表

## 事業所における自己評価総括表

○事業所名	児童発達支援GIFT			
○保護者評価実施期間	2025年11月25日 ~ 2025年12月13日			
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	29名	(回答者数)	27名
○従業者評価実施期間	2025年11月25日 ~ 2025年12月13日			
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	6名	(回答者数)	6名
○事業者向け自己評価表作成日	2026年1月10日			

## ○分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	毎日活動内容を変えた多様なプログラムを実施	毎日活動内容を工夫し、多様なプログラムを実施することで、子ども一人ひとりの興味・発達段階・特性に応じた支援を行っている。少人数体制のもと職員配置を手厚くすることで、個別性の高い丁寧な療育が可能となっており、安心して過ごせる環境づくりに努めている。	今後は、子ども一人ひとりのアセスメントをより丁寧に行い、活動内容や支援目標がより明確に結びつくよう支援の質の向上を図っていく。また、職員間での情報共有やケース検討の時間を定期的に設け、支援方法の統一や専門性の向上に努める。小さな成長を丁寧に振り返り、支援内容の見直しを継続的に行っていく。
2	クッキング週間を設けている	毎月一週間を「クッキング週間」として位置づけ、食育活動を継続的に実施している。事業所内で栽培した野菜をクッキングに取り入れることで、食材に親しみを持ちやすくし、偏食の軽減や「食べてみよう」という意欲の向上につなげている。また、調理活動を通して、五感を使った経験や成功体験を積み重ね、生活習慣の形成や自己肯定感の育ちを支援している。	毎月実施しているクッキング活動について、子ども一人ひとりの発達段階や偏食の状況に応じた目標設定を行い、無理のない形で「食への関心」や「挑戦する気持ち」を育てていく。事業所で栽培した野菜についても、栽培から収穫、調理までの経験をより丁寧につなげ、成功体験を積み重ねられる支援を行う。
3	自宅、園への送迎サービス	自宅や園への送迎を実施することで、保護者の負担軽減を図り、継続的かつ安定した支援につなげ、通所しやすい環境を整えている。送迎時に保護者とその日の様子や困り事等、話す機会が増え共有出来る事が多くなる。	保護者や園等との連携を一層強化し、送迎時の情報共有や連絡アプリ等を活用しながら、家庭・園生活とつながる一貫した支援を行っていく。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	保育所・幼稚園等や地域の子どもたちとの交流の機会が十分に持てていなかった。	保育所や幼稚園等、地域との交流については、子ども一人ひとりの発達段階や特性への配慮を優先するあまり、集団交流に向けた具体的な計画や調整が十分に行えていなかったことが要因と考えられる。また、他機関との連携体制や交流のための人員配置・時間確保について検討が不十分であった点も、継続的な交流機会につながらなかった理由の一つである。	今後は、子どもたちが地域の中で他児と関わる経験を持てるよう、園や関係機関との連携を進め、交流の場づくりについて検討していく必要がある。
2	きょうだい向けイベント等による交流の機会を十分に設けることができていなかった。	きょうだい向けイベント等については、日々の療育支援を優先する中で、家族支援に関する企画・運営まで十分に手が回らなかったことが要因と考えられる。また、保護者やきょうだいのニーズを把握する機会が少なく、具体的な実施方法や内容の検討が不十分であったことも、交流の場を設けられなかった理由の一つである。	きょうだい向けイベントについても、発達段階や年齢差に配慮した内容を検討し、安心して参加できる機会を段階的に設けていく。職員間で役割分担を行い、無理のない運営体制を整えることで、家族全体への支援の充実を図っていく。
3	定期的に訓練は実施していたが、保護者への周知が不十分であった。	非常災害に備えた避難訓練等については定期的に実施していたものの、保護者への周知方法が限られており、実施内容や対応体制について十分に共有できていなかったことが要因と考えられる。また、情報発信を行う仕組みが整っておらず、周知を後回しにしてしまっていた点も課題であった。	今後は、非常災害時の対応や避難訓練の実施状況について、保護者へ分かりやすく伝える機会を確保していく。具体的には、連絡アプリや、文書配布、ライン等を活用し、訓練内容や非常時の流れを定期的に周知する。